

南支

南支那北江作戰

福岡県 靄田 喜代次

私の部隊は、第二十三軍直轄部隊第十二師団第一建
築輸卒隊・波八六三二部隊です。

昭和十七年九月、南支那黃埔に上陸、広東市東山地
区の部隊に到着いたしました。到着後は広東周辺の警
備及び設営作業の軍務に精励し、昭和十九年九月「湘
桂作戰」(西江作戰と北江作戰)に参加いたしました。

昭和十九年十二月、西江作戰から広東市東山地区の
原隊に帰隊したら次の作戰命令を受けました。それは
広東市より北江沿いに新街、源潭墟、連江口、英徳と

大陸縦断鉄道の一部粵漢鉄道の開通を目指す作戰だっ
たのです。

昭和二十年一月、広東市東山の原隊を出発した。主
な任務は「架橋作業と橋の修復」と隊長より命を受け
ました。

器材資材と兵を乗せた軍用自動車で出発した。広東
市北方四〇キロの新街には、鉄道第十五連隊の一個大
隊、丹羽少佐が駐屯し、第五十六野戦道路隊も駐屯し
ており、我が部隊との共同作業について連日協議がな
された。先ず苦力の大量動員は絶対条件となった。広
東から源潭墟までは平地で鉄道路床の被害はほとんど
なく、枕木を敷きレールを敷設するだけだ。新街まで
は自動車で来て、それから先は自動車列車だ(タイヤ
を脱してレールの上を走る)。簡単に出来るのです。

この自動車列車は源潭墟まで、それから先は川幅五〇メートルをはさんで盛土の路床だ。その盛土が鋸の歯のようにけずりとられているので、ここから英徳までは船の便に頼らなければならぬ。源潭墟にて民船を雇船し、北江を英徳目指して進むのです。北江は川幅が広くその五分の一が水が流れ、その五分の四は砂浜の所が随所にあり、その砂浜に中国の船頭は船からのロープを腰につけて引つ張るのです。

川幅が狭くなれば岸にあがり引つ張るのです。このようにして船は遡る。この川の周辺は治安が良好ですが、匪族の襲撃に備えて警備隊の兵が船の速度に合わせて警備してくれる。途中、連江口の激流の難関を突破して目的地の英徳につく。それより支流を約六キロの上流にある黄珠塘につく。この部落は親日的で治安も良好だ。後述すべきですが副食の魚肉、野菜等は部隊の需要に応じてくれる。兵の宿舍となる部隊の集会場をも提供してくれる。

いよいよ鉄道の建設にとりかかる。付近の部落は生い茂る防風林の松の木の伐採にとりかかるのです。ふ

たかかえはある年輪一〇〇年を越すのばかり目にはいる。格好の橋の資材になる。伐採にゆく前に部落民とくに長老の同意が必要となり、大陸縦断鉄道建設のためとか、広東まで僅かな時間で日帰り往復ができる。広東からの日用品雑貨等すべて安値で買えるようになると力説した。しかし長老の伐採反対の哀願も聞き入れられずに、伐採にふみきることになった。

その数は、正確な数は分らないが一〇〇本以上。このような反対を押し切つての伐採のためその後の宜撫工作が必要となり、折にふれ隊長同伴し医薬品、日用品等不足するものを少量与えて、宜撫工作に努めた。

架橋工事も順調に進んでいた。昭和二十年六月、中支那より広東目指していた鯨兵団の一部の部隊の通過後、今までと一変して親日的な行動が抗日的となった。我が部隊も特に警備を重要視しなければならぬようになった。

前述したように、私の部隊は第二十三軍直轄であり、分任官の私は軍経理部から臨時軍事費を受領し、伐採した松の木の代金として幾らかの儲備券を渡していた

のが私にとつていくらかの慰めとなっています。

昭和二十年六月、北江作戦は中止の命下り、黄珠塘―英徳―源潭墟を経て広東市東山に帰り、戦塵の疲れもとれないまま直ちに、白雲飛行場の奥の鳳凰山の麓の龍眼洞陣地構築に出発した。時に昭和二十年七月一日。

木一本なく草山が続くこの地で、第二十三軍司令部を移転するための陣地構築だったが、これも作業なかなばにして終戦の八月十五日を迎えた。

南支那 戦火は遠き 日のことか

戦闘語る 我は老いたり

【解説】

第二十三軍（波兵团）の南部粵漢鉄道打通作戦作戦指導計画の概要は次のとおりである。

『軍八昭和二十年一月中旬頃攻撃ヲ發揮シ、ナルヘク速ヤカニ韶関（広東北方二〇〇キロ）以南ノ粵漢鉄道ヲ急襲占領スル 之カ為第百四師団主力ヲ以テ仏岡（広東北北東九〇キロ）ヲ経テ韶関ヲ占領シ次テ韶関、英徳（仏岡北西五〇キロ）間ヲ掃蕩スルト共ニ一部ヲ

以テ源潭墟（広東北方五〇キロ）ヨリ北進セシメ英徳以南ノ鉄道ヲ占領セシム、尔後独立歩兵第八旅団（肝ヲ北進セシメ韶関（不舎）以南ノ粵漢鉄道ノ警備ニ任ス 第百四師団（鳳）ハ之ニ伴ヒ海豊（広東東方二〇〇キロ）、陸豊（海豊東方三四キロ）付近ニ転進シテ対米作戦ヲ準備ス』

とある。第二十三軍（波）、第百四師団は、湘桂作戦に於いて、昭和十九年十一月、米航空基地柳州を攻略反転し、東広付近旧駐地に帰還した。第十一軍（呂）の第四十師団（鯨）、第二十七師団（極）は桂林攻略後北上し、第二十軍の隷下となり、南部粵漢線を南下し、前記作戦計画による第二十三軍と、南北呼应して、粵漢線を打通したのである。その大要次の通り。

『第六方面軍の作戦計画方針 一、方面軍八昭和二十年一月中旬頃第二十軍（桜）及第二十三軍ヲ以テ南部粵漢ヲ奇襲占領シ之ヲ確保スルト共ニ有力一兵団ヲ以テ遂川・贛州地区米空軍基地ヲ覆滅ス 二、本作戦ハ粵漢線ノ重要術工物（鉄路・鉄橋その他）ノ無疵占領ヲ主眼トシ敵野戦軍ノ撃滅ハ第二義トス 三、作戦

期間ヲ概ネ二ヵ月ト予定ス

指導要領 四 第二十軍 (一) 第四十師団……

第二七師団…… (二) 韶関以北ノ粵漢線……重要術

工物無疵占領ニ務ム (三) 第二七師団ヲ……米空

軍基地覆滅ス (四) 第二三軍ト策応シ南雄地区の

敵航空基地ヲ覆滅…… (五) 作戰終了後ハ粵漢沿

線地区ヲ確保ス又第二七・第四十師団ヲ第二三軍ニ転

属ス 五 第二三軍 略……」